

「祈りと救いの仏教美術」展によせて 「法然上人絵伝断簡」(大和文華館蔵)について ——「拾遺古徳伝絵」の可能性——

紅葉にいろどられた山中を、稚児を肩にのせた僧と立文(手紙)を握った僧が歩いています【図1】。稚児が指さす前方には【図2】、懸崖作りの建物がみえます。

画面右側に住吉広尚(1781~1828)の紙中極めがあり、「法然上人最初絵伝正和年中 土佐形部大輔吉光真筆修補住吉内記広尚 至文化十三年丙子而凡五百年余」と書き込まれています。江戸時代後期の住吉家の鑑定では断簡となって散らばっていた「法然上人絵伝」の筆者に「土佐吉光」の名を挙げることが多いのですが、その絵師の実態も、本図を正和年中(1312~1317)の最初の法然上人絵伝とする根拠も不明です。しかし、上背のある人物、直立する針葉樹、山巒にそって細い茶色の弧線で表される草の葉や、広葉樹の枝ぶり、柔らかく波打つ霞などは、たしかに14世紀の絵画のスタイルです。

本図は矢代幸雄氏による初期収集品で、当館では極めに従って「法然上人絵伝断簡」(紙本着色、縦37.0cm、横50.9cm)と登録しています。

このように稚児が肩車、もしくは片方の肩に担ぎあげられて山中を行く情景は、法然幼少期のエピソード「比叡登山」の最初の場面として、法然伝を絵巻や掛幅画に絵画化する際に必ず描

かれてきました。幼い法然が、比叡山の高僧のもとへ移動する場面です。立文は紹介状で、「文殊(のように)聡明な少年)をお届けします」と記されています。

ただし、「比叡登山」は春の出来事なのに、本図が紅葉を描くのは不審です。広尚の「修補」が関係するのかもしれませんが、そのあたりはよくわかりません。

そもそもこの断簡のものとの姿はどのようなものだったのでしょうか。

天地37cmというサイズは絵巻にしては大きすぎるので、大画面の一部という可能性も考えていたのですが、展覧会準備中に画面全体に雲母引きがあることに気づきました。つまり、この断簡は、上質な雲母引きの料紙を用いた絵巻の断簡とみてまちがいないようです。現状の画面の天地は、改装に際して切り詰められていますので、もとは天地40cm余りの大型絵巻であった可能性が浮上します。

法然の伝記は大別して、法然を祖とする浄土宗で作られた『法然上人伝』と、親鸞を祖とする浄土真宗で作られた『拾遺古徳伝』の二種類があります。後者は、親鸞との交流を「拾遺」して編集された法然伝です。親鸞が法然の後継者であることを主張するもので、親鸞の曾孫覚如(1270~1351)が1301年に撰述したものです。そして、鎌倉時代末か

ら南北朝時代にかけて、両宗それぞれで、法然伝絵巻の制作が重ねられ、そのうちの数例が現存しています。

それらを見渡すと、浄土宗の『法然上人伝』の絵巻の天地は32cm程度の通常サイズであるのに対し、浄土真宗の『拾遺古徳伝』の絵巻は、断簡をつなぎ合わせたものなども含め4本確認されていますが、すべて天地40cm前後の大型絵巻であることに気づきます。つまり、サイズから、本図は浄土真宗系の絵巻の断簡だったと推測できます。そこで、現存する「拾遺古徳伝絵巻」諸本(4件)と本図とを比較してみましょう。

まず、14世紀初頭の無量寿寺所蔵の絵巻(「比叡登山」を含む複数の断簡をつないで一卷としたもの)は、自然景観や霞の表現、濃厚な色彩が、本図に近いと感じられるものです。そこに描かれた当該場面【図3】は、テキストどおり季節を春とし、登山する人数も増えています。立文を最後尾の僧が握っている点は本図と同じです。

次に、1320年代に作られた常福寺所蔵の全9巻の「拾遺古徳伝絵巻」と比べてみましょう。常福寺本は唯一、当初の状態を保つものですが、図様を簡略化する傾向があり、「比叡登山」場面に手紙を握る人物はいません。また、あっさりとした色彩感覚や余白の多さも、本図の表現とはかけ離れたものです。

そして残り2作例は、「比叡登山」場面が失われているうえに、本図と比較できるような、自然景観を含む場面も残っていないので、残念ながらくらべようがありません。

つまり、本図が切り出された絵巻がどのようなものであったかを、現存する「拾遺古徳伝絵巻」とてらしあわせてみても、見当が付きません。

いっぽう、絵巻ではなく、浄土真宗寺院に伝わる掛幅形式の作品にも目を配ると、1338年制作の光照寺所蔵の作品【図4】や、それよりおくれる満性寺所蔵の作品に「比叡登山」場面がみられます。しかしどちらも、割り当てられた画面上のスペースは狭小で、それに合わせて図様も単純化し、類型化しています。それらと本図を較べれば、本図の、僧の身体の向きを変えて、つづら折りの険しい山道を表わすところに、類型化以前の豊かな表現力を感じることができ

ます。以上のようなことから、あえて推測すれば、本図が切り出された絵巻は、無量寿寺所蔵の絵巻に近い、重厚な14世紀の「拾遺古徳伝絵巻」であったろうと考えています。季節の齟齬は問題として残りますが、稀少な中世やまと絵の断簡といえるでしょう。

(泉万里)

参考文献

1. 梅津次郎『絵巻物残欠の譜』角川書店 1970年(初出は『日本美術工芸』326号 1965年)
2. 宮次男「拾遺古徳伝絵残欠」『古美術』28号 1969年
3. 『真宗重宝聚英』第6巻 同朋舎出版 1988年



図1 「法然上人絵伝断簡」当館蔵



図2 「法然上人絵伝断簡」(部分)



図3 無量寿寺所蔵「拾遺古徳伝絵巻」無量寿寺蔵 図版出典：参考文献3



図4 「法然上人絵伝(拾遺古徳伝)」隆円筆 光照寺蔵 図版出典：参考文献3

季刊 美のたより No.215

令和3年7月3日

発行 大和文華館